

## 人間とクジラの関係の歴史的变化に関する一考察： アラスカ先住民イヌアピットとホッキョククジラ の関係を中心に

著者	岸上 伸啓
雑誌名	人文論究
巻	88
ページ	57-66
発行年	2019-03-28
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00009399">http://hdl.handle.net/10502/00009399</a>

人間とクジラの関係の歴史的变化に関する一考察  
—アラスカ先住民イヌピアットとホッキョククジラを中心に—

岸 上 伸 啓

## 人間とクジラの関係の歴史的变化に関する一考察\* —アラスカ先住民イヌピアットとホッキョククジラを中心に—

岸 上 伸 啓

### 1. はじめに

現生人類は約20万年前にアフリカで発生し、その一部の人びとが約6万年前にアフリカを出て、世界各地に拡散していったと考えられている。人間は、移動先の身の回りにあるさまざまな生き物を食料や生活資源として入手し、利用することによって多様な環境に適応し、命をつないできた。多くの生き物は、人間の生存にとって不可欠な存在であり続けてきた。

人間の総人口が少なく、かつ分散していた時期には、特定の生き物を一方的に収奪しても、その生き物の種全体や環境には大きな負荷とはならず、種の絶滅や環境破壊のような大きな問題を引き起こすことは少なかった。しかし、時間が経つに従い、人口は増加を続け、人間の活動が何種類かの生き物を絶滅に追い込んだり、人間が周辺環境を改変したり、環境に対して影響を及ぼすようになった（メドウズほか 1972）。当然のことながら、この人口増加やそれに伴う諸活動の増加は、人間と動物の関係に大きく影響を及ぼしつつ、変化を生み出してきた。

本論文では、人間と生き物、特に動物との関係の変化について検討を加えたい。より具体的には、アラスカ先住民のイヌピアットとホッキョククジラ関係を事例として、人間とクジラ関係の歴史的变化について考察を加える。なお、両者の関係を研究するために、歴史生態学（historical ecology）の視点を採用する。歴史生態学の視点とは、人間社会の変化と人間社会を包摂する生態環境の変化の間に見られる相互作用過程に着目し、生態環境がいかに関係者に影響してきたかのみならず、人間社会がいかに関係者に影響を及ぼしてきたかをも考慮にいれながら、人間社会と生

態環境との関係を通時的に解明しようとする視点をさす。すなわち、ここではクジラがどのように人間に影響し、人間がいかに関係者に影響してきたかという相互作用の関係に注目する。

本論文の構成は、次の通りである。第2節では、人間と動物の関係を俯瞰し、分類するための枠組みを提示する。第3節では、アラスカ地域における人間とクジラ関係を、その分類枠組みに基づいて、(1)人間がほとんどクジラを利用しなかった時代（～10世紀以前）、(2)人間がクジラを積極的に利用した時代（10世紀～20世紀後半）と(3)クジラを保護しつつ利用する時代（20世紀後半～）の3時代に区分して、報告する。第4節では第3節の事例に検討を加え、第5節において結論を述べる。

### 2. 人間と生き物の関係の分類

人間と生き物の関係を分類する方法は、多数ある。たとえば、人間側の視点からその関係を分類しようとする、生き物は可食と不可食や、飼育と野生、ペットとそれ以外などさまざまな基準で分類することができる。筆者は、その関係を分類するための基準や枠組みを検討した結果、利用と非利用、致命的と非致命的という2つの軸を分類の枠組みに利用することを思いついた。この枠組みがどれだけ有効性や普遍性を持つかは定かではないが、本論文で取り上げる事例を理解する枠組みとして提案したい。

人間から見ると生き物は、何らかの目的で利用するか、しないかに大別できる。これは人間が生き物を自らの資源として利用するか、しないかということをも基準としている。利用するもしくは、利用しない時に、対象の生き物の命を奪うか、奪

表1 人間による利用・非利用と致死性的・非致死性的という条件に基づく生き物との関係の分類表

	利用	非利用
致死性的	タイプ1 致死性的利用	タイプ3 致死性的非利用
非致死性的	タイプ2 非致死性的利用	タイプ4 非致死性的非利用

わなないか、すなわち、致死性的利用や非致死性的利用であるかで分類することができる。この利用・非利用および致死性的・非致死性的という条件を掛け合わせると、人間から見た生き物との関係は、表1のように4つに分類することができる。

タイプ1は致死性的利用関係である。これは、人間が飼育動物や野生動物を殺して食べる場合の人間と生き物の関係である。具体的には、人間と牛や豚、鶏、魚、クジラなどとの関係である。

タイプ2は非致死性的利用関係である。これは、人間が飼育生物や野生生物を殺さずに利用する場合の人間と生き物の関係である。具体的には、ペットのネコやイヌ、動物園のゾウやトラ、水族館のアシカやウミガメ、信仰の対象としてのクジラ、ホエール・ウォッチングのクジラやイルカなどと人間との関係である。

タイプ3は致死性的非利用関係である。殺すことが目的であり、利用しない場合のような人間と生き物との関係である。具体的な事例は、人間に有害なコレラや赤痢の消毒殺菌や農場を荒らすシカやイノシシの殺処分による害獣駆除などにおける人間と生き物との関係である。

タイプ4は非致死性的非利用関係である。意図的に殺さずにかつ利用しないような絶滅危惧種の保全や保護、害獣の追い払いなどの場合の人間と生き物との関係である。また、人間が資源として利用しない生き物との関係もさす。具体的な事例としては、絶滅危惧種のシロナガスクジラの保全や農作物を荒らすサルなどの害獣の追い払いなどで見られる人間と生き物との関係である。

この4つのタイプを利用すれば、人間と生き物との関係を分類し、理解することに役立つと考える。本論文では、この分類枠組みを用いて、アラスカ先住民イヌピアットとホッキョククジラの関係とその変化を分析する。

### 3. アラスカ先住民イヌピアットとホッキョククジラの関係とその変化

ホッキョククジラ（英名 Bowhead whale、学術名 *Balaena mysticetus*）とは、成獣で体長が約15メートル、体重が約50トンになるヒゲクジラの1種である。1986年のレッドリストでは絶滅危惧種と分類されていたが、生息数が増加したため、2008年の同リストでは低危険種（絶滅の恐れもなく、近い将来絶滅危機に瀕する見込みが低い種）のひとつに分類されている。アラスカ先住民のユピートやイヌピアットにとってホッキョククジラは重要な食料資源でありかつ重要な社会・文化的資源であるため、現在でも捕獲している（Kishigami 2013）。

ベーリング海域で越冬するホッキョククジラ（以下、クジラと略称）のグループは、春から秋にかけて北極海（チュクチ海やポーフォート海）で過ごす。このため、春には北上し、秋には南下するという季節移動を毎年、繰り返している。ベーリング海峡地域沿岸やチュクチ海・ポーフォート海の沿岸に住む人びとは、約1000年前から積極的にクジラを捕獲するようになったことが考古学的に知られている（Fitzhugh 2016; Saville 2005）。

また、約8000~6000年前の考古学遺跡からクジラの骨が出土しており、寄り（漂着）クジラを利用した痕跡であると推定されている（Saville 2005: 54）。ベーリング海峡の旧大陸側沿岸地域では捕鯨を約2500年前に開始したらしい（Fitzhugh 2016）。いずれにせよ、この地域に住む先住民はクジラを食料資源として1000年以上にわたって利用してきたため、アラスカ先住民は、クジラについて特別な考え方を形成し、特別な関係を持ち続けてきた。

筆者の調査地であるアラスカ州最北端にあるパロー村のイヌピアットの捕鯨者は、春季（5月上旬ごろ）と秋季（10月上旬ごろ）に近海を回遊す

るクジラを捕獲している。現在、この捕鯨は、人類文明の経済活動が生み出した地球温暖化という新たな極北景観において営まれ、さまざまな問題に直面している (Kishigami 2010; 岸上 2014)。

イヌピアットによるクジラの利用・非利用の視点から見ると、大きく3つの時代に区分できる。その3つとは、クジラの非利用および非積極的利用の時代 (~10世紀以前)、クジラの積極的利用の時代 (10世紀~20世紀後半)、クジラを保護しつつ利用する時代 (20世紀後半~) である。

### 3.1 非利用および非積極的利用の時代 (~10世紀以前)

一頭のクジラは、大量の肉や脂皮などの食料資源、鯨油などの燃料資源、ヒゲや骨などの道具の材料や建材を人間に提供できる。生きたクジラを意図的に捕獲するためには、かなり高度な海上手段の製作技術と捕獲技術、捕鯨組織を必要とするので、一定の条件を満たすことが必要である (Savelle 2005: 54)。しかし、死んだクジラが海岸に打ち上げられることがあり、人間は捕鯨をおこなう前からそのようなクジラを利用したと考えられる。すでに指摘したようにベーリング海沿岸や北太平洋沿岸の約8000年前~6000年前の遺跡からクジラの骨が出土しているが、これらは漂着したクジラの骨を利用した痕跡であり、捕鯨を行なったとは考えられていない (Savelle 2005: 53)。

狩猟採集民が海洋資源を利用し始めたのは、比較的年代がおそく、かつ特殊化した狩猟集団であったと考えられている。捕鯨となるとその時期はさらに新しくなる。かつてアラスカのケーブ・クルーセンスターン (Cape Krusenstern) 遺跡 (3300年前~3400年前) は捕鯨に関連する遺跡だと考えられていたが、現在では、漂着したクジラを利用した痕跡だろうと考えられている<sup>1)</sup> (Savelle 2005: 53-54)。近年、ベーリング海峡地域で3000年ぐらい前に捕鯨が行われていたという説が提起されているが、証明されていない。現時点では、ベーリング海・ベーリング海峡地域で約2500~2000年前に捕鯨が始まり、約1000年前に北や東に広まっていったと考えられている (Fitzhugh 2016; Savelle 2005: 55; Stoker and Krupnik 1993)。

アラスカ地域における10世紀以前の人間とクジラの関係は、ベーリング海・ベーリング海峡地域を除けば、漂着クジラを利用したか、特別な状況でのみ捕鯨を実施したかのいずれかであり、ホッキョククジラを不可欠な資源として積極的に利用したのではなかった。この関係が大きく変化するのは、地球の温暖化現象が見られた10世紀ごろ以降である。

以上から10世紀以前のアラスカ地域の沿岸先住民は、漂着したクジラを利用したか、時おり捕鯨し利用したかのいずれかであり、多様な食料資源の中のひとつに過ぎなかった。このため、とくにクジラと特別な関係があったとは考えられない。

### 3.2 クジラの積極的利用の時代 (10世紀~20世紀後半)

アラスカ沿岸地域では約1000年前から積極的な捕鯨が始まった。現在から800年ぐらい前の中世の温暖期になると、捕鯨は、アラスカ地域からのチューレ人の東進によって、カナダ極北地域やグリーンランドに急速に広がった。その後の16、7世紀頃に寒さのピークを迎える寒冷化の進行に伴い、カナダ極北地域等では捕鯨が徐々に衰退した。この衰退に拍車をかけたのは、欧米人による商業目的の捕鯨であった。欧米人による捕鯨が東部極北地域の沖合で16世紀頃に始まり、1848年から1914年ごろにかけてはアラスカ北西部沿岸地域やカナダ西部極北地域の沖合でも行われた。当時の欧米社会ではクジラの脂肪 (鯨油) はランプの燃料や石鹸の原料として、ヒゲはコルセットやムチ、バネ、かさのはりの原料として利用されていた。このため欧米から来た捕鯨者は、多数のクジラを捕獲し、クジラの生息数が激減した。

本論文が対象とするアラスカ地域では1848年から1914年にかけて、おもにアメリカの捕鯨者によって商業捕鯨が行われた。彼らは、16,594頭のクジラを捕獲したと考えられている (Bockstoce et al. 2005: 4, 6)。また、ある研究者は、その捕獲総数は1万8千頭以上であると推定している (Krupnik 1993: 80)。いずれにせよ、商業捕鯨はクジラの頭数を激減させてしまったことによって、先住民の捕鯨にも甚大な影響を与えた。クジラが

少なくなり、採算が取れなくなると、アラスカ地域での商業捕鯨は行われなくなった。なお、この商業捕鯨時代にはアラスカ先住民たちはアメリカの捕鯨船の乗組員として雇用されたり、捕鯨船への食料などの供給者として活動したりした。

一方、アラスカ先住民は商業捕鯨が終わった後も食料確保を目的とする捕鯨を続けた。20世紀初めから1970年頃までアラスカ先住民は1年あたり平均11頭のホッキョククジラを捕獲していた。この捕獲数は、アラスカ先住民の食料需要の一部を満たすに過ぎない状態であった。

1977年に国際捕鯨委員会（以下、略称IWC）はアラスカ先住民によるクジラの過剰捕獲と亡失クジラ（仕留めたが陸揚げできなかったクジラ）の増加を懸念し、彼らの捕鯨を一時中断させたが、1978年以降に捕獲数の上限を設定した上で、復活を認めた。そして1980年ごろにはIWCによって正式にクォータ制（捕獲頭数上限枠制度）が導入されるとともに、アラスカ先住民とアメリカ政府海洋大気庁（National Oceanic and Atmospheric Administration、略称NOAA）とのクジラの共同管理のもと、IWCの「先住民生存捕鯨（Aboriginal Subsistence Whaling）」として実施されるようになった。このような経緯でアラスカ先住民はクジラを以前のように自由に捕獲することはできなくなった。

アラスカ沿岸地域に住む先住民にとってクジラは主食となる食料としてなくてはならない存在であったし、現在でも象徴的に重要な食料であり続けている。以下では、この時代に形成され、現在でも形を変えながらも存続しているアラスカ先住民イヌピアットのクジラに対する考えを彼らの世界観や宗教観などに即して紹介する（Bodenhorn 1990；岸上 2014, 2018a；Sheehan 1997；Turner 1990）。

イヌピアットは、クジラは人間の言葉を理解し、遠くから人間の行動を見ることができると特別な能力を持っていると考えている。そして彼らは、クジラに対して正しい心を持ち、品行方正な態度で接する捕鯨者およびその妻のもとに、クジラは獲られるために自らやって来てくれる、と信じている。すなわち、捕鯨の成功はクジラの決心に左右されると考えられているため、イヌピアットに

とってクジラとの良好な関係を保つことが不可欠である。イヌピアットは彼らのもとに来てくれたクジラを、敬意をもって捕獲し、その靈魂をクジラの国に送り返さなければならない。そうすれば、同じクジラは同じ捕鯨者のもとに繰り返し戻ってきてくれる。このため、クジラを司る精霊や捕獲したクジラに対し、感謝の祈りを捧げ、クジラの靈魂を楽しませ、それをクジラの国に帰すことが必要である。また、鯨肉や脂皮などはみんなに分け与え、独り占めしてはならない。もし、ハンターがクジラの嫌がる発言や行為をすれば、そのハンターからクジラは遠ざかり、不猟に陥ると信じられている。

独自の信仰やタブーも生み出された。ハンターは、クジラを恐怖に陥れるような発言をしてはならない。したがって、彼らは「捕鯨に行く」や「クジラをとる」といったあからさまな発言を慎まなければならない。クジラは血の色や汚い場所を嫌うので、捕鯨に従事するハンターは血の付いた狩猟道具の使用や血のついた狩猟用防寒服の着用を避けなくてはならない。また、クジラに喜んで村を訪れ、心地よく村の中で滞在してもらうために、春季捕鯨開始の前にクジラの肉などを保管する地下貯蔵庫を掃除したうえで、新雪を底面に敷き、きれいにしなくてはならない。

捕獲後、解体場所へクジラを曳航する前に、捕鯨に参加した複数のウミアックでクジラの周りを取り囲み、捕鯨キャプテンとハンター全員でクジラに感謝の祈りを捧げる。彼らは、この祈りが終るまで沈黙を守り、喜びを顔や態度、言葉で表してはならない。春季捕鯨の場合は、海氷上でのクジラの解体が完了すると、捕鯨キャプテンとハンターはクジラの靈魂が宿っているとされる頭蓋骨を海中に戻すなどの儀礼を行い、クジラの再生を祈る<sup>29</sup>。

イヌピアットは、クジラは鯨肉などの食料を寛大に他の人びとと分かち合う人や、他人と協調して生きている人のもとには喜んでやってくるが、そうでない人を避けると信じている。このため、イヌピアットの捕鯨者は、鯨肉などを他の人びとと分かち合ったり、困っている人に分け与えたりする。また、他者の悪口を言うことや他者に暴力

を振るうこともしないように努める。さらに、飲酒や麻薬に溺れるなど社会的に悪いことを避ける。このように伝統的なクジラ観が現在のイヌピアットの行動に大きな影響を及ぼしている。また、イヌピアットの理想的人間像（観）は、クジラとの調和的な関係から構築されていると言える。捕鯨キャプテンやそのボートの乗組員であるハンターは、クジラ存在を常に意識し、自らの発言と行動に注意しながら日常生活を送っているのである（岸上 2014: 111-116; Brewster ed. 2004）。

そしてクジラとの良好な関係を維持するために、理想的なイヌピアットの生き方の基盤になる価値観が形成された。彼らが重要視する事柄は、(1) 老人や他の人たちを愛し、尊敬すること、(2) 自然に敬意を払うこと、(3) 家族や親族、および自らの役割を熟知すること、(4) 分かち合うこと、(5) 言葉（母語）の知識、(6) 協力と協働、(7) ユーモアのセンスを持つこと、(8) 狩猟の知識、(9) 他の人たちに共感すること、(10) 謙遜さ、(11) 葛藤の回避、(12) 誠実であり信仰心に厚いことなどである（岸上 2014: 117）。

バロー地域のイヌピアットは1900年前後からキリスト教に改宗し始め（Burch 1994）、現在では、ほぼ全員がキリスト教徒である。敬虔な捕鯨キャプテンは、聖書を捕鯨キャンプにもって行き、海を見張りながら、クジラが近づいてくるようにそれを手に持ち、祈願している。彼らはキリスト教の神（以下、神と略称）が捕鯨者にクジラを遣わしてくれていると信じているが、クジラに対する敬意や感謝を忘れていないわけではない。むしろクジラに関する伝統的な世界観は根強く残っており、キリスト教的な考え方で混合している。彼らにとってクジラを捕る行為とは、単なる食料獲得のための活動ではなく、彼らとクジラとの間の良好な関係に基づく伝統的な活動でもある。

捕鯨キャプテンとその捕鯨集団は捕鯨に成功した後、クジラやキリスト教の神に感謝するとともに、クジラ産物を分かち合うために捕鯨キャプテン宅での祝宴ニギブカイ、アプガウティ、ナルカタックなどを開催する。アプガウティやナルカタックおよびそれらの後のドラム・ダンスは、イヌピアットの人びとがクジラを遣わした神や命を

捧げてくれたクジラに感謝するとともに、各捕鯨集団の結束、神とクジラとイヌピアットとの関係、捕鯨集団と村人の関係、さらには、これらの祭りに参加した村人意識を再確認する機会となっている（岸上 2014; Kshigami 2013）。

これらのクジラや捕鯨に対する考え方や宗教的実践を見ると、イヌピアットは伝統的な考え方を今でも保持し続けている一方で、現在では「神がイヌピアットの捕鯨者にクジラを遣わしてくれる」と信じているため、キリスト教が彼らの考え方の基盤となっていることが判る。現在のイヌピアットの人びとは、伝統的な世界観をキリスト教と融合させて、独自の世界観を保持しつつ、捕鯨活動を行なっている。以上のように、アラスカ先住民はクジラを社会的な人（social person）のような存在として特別な関係を歴史的に創り出してきた。ヴィクターは、彼らの関係についてアラスカ先住民の世界観の上では、人間とクジラは敵対するのではなく、お互いの生き方を尊重しあうパートナーであると指摘している（Victor 1987）。

この時期に、イヌピアットにとって、捕鯨、その後の共食とドラム・ダンスを伴う祭り、クジラをめぐる世界観やタブーは、イヌピアットの行動や社会関係、文化の基盤となり、歴史的に継承されてきた。すなわち、この時代にはホッキョククジラとイヌピアットの間には、捕鯨活動を通して特別な関係が作り出された。イヌピアットはクジラを「ケア」(care) し、クジラはイヌピアットの期待に応答するという象徴的互酬関係が形成され、現在でも存在しているのである。

### 3.3 クジラを保護しつつ利用する時代（20世紀後半～）

第2次世界大戦後には、競争的な商業捕鯨の結果、大型鯨種の頭数が激減するに従い、多くの国々が商業捕鯨から撤退して行った。そして1972年にストックホルムで開催された国連人間環境会議では米国が商業捕鯨のモラトリアムを提案した（大隅 2003: i）。この提案は同年に開催されたIWC総会では採択されなかったが、1982年のIWC総会においてホッキョククジラを含む13種類の大型鯨類の商業捕鯨の一時停止が承認され、現在もそのモ

ラトリウムは継続中である。一方、IWCは、ロシアや米国、グリーンランド、ベクウェイ島の先住民の捕鯨を条件付きで認めているし、IWCに加盟していないカナダ政府はイヌイットの捕鯨を条件付きで認めている。また、IWCは世界各地で行なわれているイルカ漁などを管轄外にしているため、各国の管理のもとでイルカ漁が行われている。

20世紀後半になると、国際的な環境保護団体や動物保護団体が反捕鯨活動を大々的に展開した。たとえば、世界自然保護基金（略称WWF）やグリーンピース（Green Peace）、シー・シェパード保全協会（Sea Shepherd Conservation Society）、国際動物福祉基金（略称IFAW）、環境調査エージェンシー（略称EIA）、クジラ・イルカ保全協会（略称WDC）、米国人道協会（略称HSUS）、英国王立動物虐待防止協会（略称RSPCA）などの国際的団体が反捕鯨運動を大々的に繰り広げ、多くの政府や一般市民に大きな影響を与えることによって、反捕鯨を支持する政府や市民の数が増加した。このため、大型鯨類を対象とする商業捕鯨の再開はますます困難になるとともに、世界各地の先住民による生業捕鯨や地域漁民による小型鯨類捕獲などの存続にも悪影響が出始めている。このように、20世紀後半頃をひとつの契機として、世界各地でクジラは人間にとって利用するための資源から保護の対象へと移行しつつある。

ここで問題になるのは、先住民とクジラの関係である。アラスカ先住民社会では、捕鯨を通して人間はクジラと特別な社会関係やそれに関する世界観を形成してきた。1980年代から、イヌピアットらはIWCのクォータ制のもとで、捕鯨を実施しており、鯨の肉や脂皮は実質的な食料というよりも象徴的な食料に過ぎなくなっている。しかしながら捕鯨とその産物である鯨肉や脂皮などを分かち合って食べることは、彼らの社会・文化的アイデンティティや社会関係の再生産の基盤であり続けている。このため、彼らが捕鯨をやめることは、彼らの社会・文化的アイデンティティや社会関係の大きな変更を余儀なくすることを意味する。

クジラの持続可能な利用が可能な場合でも、捕鯨に反対し、クジラを食料資源とすることに反対する社会的な動きがますます増強している（岸上

2017）。この社会的潮流には「動物福祉」や「動物の権利」に基づく社会運動の国際的な展開が深く関与している。1975年にはオーストラリアの哲学者ピーター・シンガー（Peter Singer）が『動物の解放』を出版し、家畜動物や実験用動物に対するむごい扱いを取り上げ、人間の便宜のために動物を搾取することに対して異議申し立てを行った。彼は、「自分自身が属する種の利益を擁護する一方で、他の種の利益を否定する偏見と態度」を種差別と呼び、人類による種差別をなくすことを訴えた。この考えは、動物保護運動の思想的支柱となった。そして多くの動物保護団体は、クジラやゾウなど大型動物を保護のシンボルとして利用し始め、マスメディアを駆使して反捕鯨運動を推進してきた結果、欧米社会ではクジラを神格化するにいたったのである（森田 1994; Kalland 1993）。

反捕鯨団体として、シー・シェパード保全協会が有名である（河島 2012）。しかし、反捕鯨団体には、商業捕鯨のみに反対する団体や先住民生存捕鯨を含めてあらゆる捕鯨に反対する団体、クジラのみならず全ての動物利用に反対する団体などがあり、多様性が認められる。石井らは、動物福祉、動物の権利（動物解放運動）、予防原則の立場から動物保護団体や環境保護団体を3つのカテゴリーに整理している（石井・真田 2106: 79-86）。

第1のカテゴリーは動物福祉に基づく団体である。動物福祉とは、動物を研究実験で利用したり、食用に飼育する場合、動物をみだりに殺傷したり、苦しめたりしないようにするだけでなく、適切に取り扱わなければならないという考えをさす。このカテゴリーに入る団体には人道協会（Humane Society）や動物保護のための世界協会（World Society for the Protection of Animals）、WDC、IFAWなどがある。これらの団体は、クジラに苦痛を与えることなく捕殺することは不可能であると考えているため、先住民捕鯨を例外として捕鯨に反対している（石井・真田 2015: 82）。

第2のカテゴリーは、動物の権利を強調し、動物解放運動を目標としている団体である。動物の権利とは、動物は誰かの所有物ではなく、人間と対等な権利を持つ生物であるという考えである。このカテゴリーの団体は原則としてすべての捕鯨



に反対している（石井・真田 2015: 83）。典型的な事例は、シー・シェパード保全協会などがある。

第3のカテゴリーは、予防原則の立場をとる団体である。予防原則とは、深刻な環境被害が予想される場合には、科学的に明確な因果関係を立証できなくとも対策を講じるべきだという考え方である（石井・真田 2015: 84）。この考えに基づく団体にはグリーンピースやWWFなどがある。これらの団体は、原則として商業捕鯨に反対しているが、商業性がなく、厳密な科学的管理制度を遵守して実施する先住民生存捕鯨には反対していない。

欧米を中心とした動物保護団体や環境保護団体は、独特なクジラ像に基づき、反捕鯨運動を展開し、国際的な世論を形成してきた。それらの団体の反捕鯨運動は、欧米諸国や南米諸国、オーストラリア、ニュージーランドの各国政府を動かすほどの影響力を及ぼすようになった（前川 2017; 高橋 n.d.）。IWCで先住民生存捕鯨への規制が強化されれば、イヌピアットらはクジラを捕獲し、食料とすることがますます困難になってしまう。この反捕鯨運動は、先住民イヌピアットとクジラの関係の維持にも悪影響を引き起こしつつあるのである。

さらに地球の温暖化が極北地域の捕鯨者に予期せぬ影響を及ぼしつつある。温暖化の結果、クジラの生態や移動経路が変化するとともに、温暖化により北極海域での輸送活動や資源開発が活発化し、先住民の捕鯨活動やクジラの生態・移動にこれまでになかった影響を及ぼしつつある（Kishigami 2010）。このような状況が続けば、アラスカ先住民の捕鯨活動は困難となり、その結果、彼らとクジラの関係は大きく変わらざるを得ないといえよう。

#### 4. クジラと人類の関係の変化

本論文では、人類とクジラの関係の変化についてアラスカ先住民イヌピアットを事例として、第1期（人間がほとんどクジラを利用しなかった時代、～10世紀以前）、第2期（人間がクジラを積極的に利用した時代、10世紀～20世紀後半）と第3期（クジラを保護しつつ捕獲する時代、20世紀

後半～）の3時代に区分して紹介した。

このイヌピアットとクジラ関係を、第2節で提起した関係の分類に基づくと、第1期にはタイプ4の非致命的非利用の関係とまれに捕鯨をしたという意味でタイプ1の致命的利用の関係が存在した。第1期の特徴的な関係は、タイプ4であるといえる。第2期はイヌピアットが捕鯨を積極的に行った時代であり、タイプ1の致命的利用の関係が特徴的であった。第3期は、イヌピアットは捕鯨を続けているという点で、タイプ1の致命的利用の関係である一方、アメリカ政府NOAAとアラスカ・エスキモー捕鯨委員会は1980年代以降鯨資源の共同管理を行っており、保護も実施している。このため、部分的にはタイプ4の非致命的非利用も並存しているといえる。

第3期における世界のクジラをめぐる趨勢を見ると、IWCの管轄のもとで先住民生存捕鯨や調査捕鯨、1982年のIWC総会でのモラトリアム議決に同意せず、留保を表明した上で実施している商業捕鯨、IWCの管轄外の捕鯨が実施されているのは事実であるが（岸上 2012; 浜口 2016）、ホエール・ウォッチングなどによる鯨類の非致命的利用の増加（岸上 2018）や、IWCや反捕鯨団体、反捕鯨政府による鯨類の保全や保護が主張されたり、実施されたりしている（岸上 2017）。この時期の世界全体における中心的な人間と鯨類の関係は、タイプ2の非致命的利用の関係とタイプ4の非致命的非利用の関係が中心となりつつあり、タイプ1の致命的利用の関係も存在しているといえる。このように考えると、2018年時点ではイヌピアットとクジラの関係はタイプ1の関係が継続している一方、世界的な趨勢は、タイプ2の非致命的利用の関係とタイプ4の非致命的非利用の関係によって特徴づけることができるといえよう。

さらに近年、注目すべき動きが政治哲学者や倫理学者の間で見られ始めた。それは先住民だからといって伝統的な狩猟活動が自動的に承認されるわけではないという主張の出現である。人類の社会や文化、経済は変化し続けてきたという歴史的事実に基づき、スー・ドナルドソン（Sue Donaldson）とウィル・キムリカッカ（Will Kymlicka）は、先住民の権利を認めることや先住

民文化を尊重することは、現代の先住民による狩猟という動物の権利を侵害する行為を承認することにはならないので、関係者間で慎重に協議を行った上で狩猟を続けたり、止めたりする必要があると主張する (Donaldson and Kymlicka 2011)。このことは、現代の先住民によるクジラの捕殺についても当てはまるため、先住民による捕鯨にもさらに批判が強まることが予想される。

### 5. 結語

人類はこれまでほとんど接触のなかったクジラを、気候変動と人類社会の技術・社会制度の高度化に伴って捕獲の対象とし、クジラを利用するようになった。当初は収奪的利用であったが、総数が減少するに従い、それは持続可能な利用をめざすようになった。しかし、気候の温暖化や人類によるクジラの過剰捕獲、思想の変化(「動物の権利」運動の拡大)の結果、クジラは保全や保護の対象とみなされるようになった。このように人間とクジラの関係は、時代とともに無関係から致命的利用関係へ、そして非致命的利用関係や非致命的非利用関係へと趨勢が移行しつつあるといえるだろう。

一方、アラスカ先住民らは、現在でも特定の規制の下で捕鯨を継続しているが、地球の温暖化とそれに伴う人類の極地での経済活動の拡大が、クジラの生態・季節移動や先住民の捕鯨活動に影響を与えている。人間の生産活動が生み出したと考えられる地球規模での環境の変化と人間社会の変化は、相互に影響しあいながらクジラと人間の間を形作っているのである。その相互関係やそれにかかわる諸アクターとの諸関係は、時代とともに変化し、複雑化しつつある。クジラを保護しつつ利用する時代にはクジラの生息数は増加する一方で、イヌピアットのような先住民捕鯨者にとっては制限付きの捕鯨となり、その実施も困難になりつつある。すなわちイヌピアットとクジラの間は変容しつつあり、クジラとの関係に基づいたイヌピアットのこれまでの生き方や価値観、社会関係が根本的な変更を余儀なくされると予想できる。

### 注

- 1) 石川県の真脇遺跡のようないくつかの縄文時代の遺跡は、約5千年前にイルカ類を捕獲していたことを示している (平口 1989; 2003; 2009)。
- 2) この再生儀礼のやり方については、村ごとに、また同じ村にあっても捕鯨キャプテンによって異なる。この差異は、今後の研究課題である。

(\*) 本研究は、平成30年度科学研究費補助金(基盤研究A)「グローバル化時代の捕鯨文化に関する文化人類学的研究—伝統継承と反捕鯨運動の相克」(課題番号15H02617)の研究成果の一部である。草稿に対し国立民族学博物館外来研究員の中村真里絵氏からコメントを頂戴した。記して感謝の微意を表す次第である。

### 参照・引用文献 (アルファベット順)

- Bodenhorn, Barbara  
 1990 I'm Not the Great Hunter, My Wife Is: Inupiat and Anthropological Models of Gender. *Études/Inuit/Studies* 14 (1-2):55-74.
- Bockstoce, John et al.  
 2005 The Geographic Distribution of Bowhead Whales, *Balaena mysticetus*, in the Bering, Chukchi, and Beaufort Seas: Evidence from Whaling Records, 1849-1914. *Marine Fisheries Review* 67 (3): 1-43.
- Brewster, Karen (ed.)  
 2004 *The Whales They Give Themselves: Conversations with Harry Brower, Sr.* Fairbanks: University of Alaska Press.
- Burch, Ernest Jr.  
 1994 The Inupiat and the Christianization of Arctic Alaska. *Études/Inuit/Studies* 18 (1/2):81-108.
- Donaldson, Sue and Will Kymlicka  
 2011 *Zoopolis: A Political Theory of Animal Rights*. Oxford: Oxford University Press.
- Fitzhugh, Ben  
 2016 *The Origins and Development of Arctic Maritime Adaptations in the Subarctic and*

- Arctic Pacific. In Max Friesen and Owen Mason (eds.) *The Oxford Handbook of the Prehistoric Arctic*. Online Publication (DOI:10.1093/oxfordhb/9780199766956.013.20)
- 浜口尚  
2016 『先住民生存捕鯨の文化人類学的研究—国際捕鯨委員会の議論とカリブ海ベクウェイ島の事例を中心として』東京：岩田書店。
- 平口哲夫  
1989 「縄文時代のイルカ捕獲活動」『石川考古学研究会々誌』32: 19-38。  
2003 「先史日本における鯨類の利用と捕獲—積極的な鯨類捕獲の始まりについて」日本鯨類研究所編『いまに生きる日本捕鯨の伝統とその源流』pp. 29-40、東京：日本鯨類研究所。  
2009 「縄文時代の捕鯨」『ビオストーリー』11: 36-42。
- 石井敦、真田康弘  
2015 『クジラコンプレックス—捕鯨裁判の勝者はだれか—』東京：東京書籍。
- Kalland, Arne  
1993 Management by Totemization: Whale Symbolism and the Anti-Whaling Campaign. *Arctic* 46 (2): 142-153.
- 河島基弘  
2012 「[法]の裁きを下すメディア時代の自警団?—シー・シェパードの反捕鯨キャンペーンの一考察」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp.302-316、東京：成山堂。
- Kishigami, Nobuhiro  
2010 Climate Change, Oil and Gas Development, and Inupiat Whaling in Northwest Alaska. *Études/Inuit/Studies* 34 (1): 91-107.  
2013 Aboriginal Subsistence Whaling in Barrow, Alaska. In N. Kishigami, H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84), pp.101-120. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 岸上伸啓  
2014 『クジラとともに生きる アラスカ先住民の現在』京都：臨川書店。  
2017 「捕鯨と動物福祉」『人文論究』86:71-81。  
2018a 「アラスカ・イヌピアット社会におけるホッキョククジラ漁をめぐる宗教実践と社会変化」『社会分析』45: 19-35。  
2018b 「現代の鯨類利用に関する文化人類学的研究：カナダ北西海岸地域のホエール・ウォッチングを中心に」『人文論究』87:49-60。
- Krupnik, Igor  
1993 *Arctic Adaptations: Native Whalers and Reindeer Herders of Northern Eurasia*. Hanover and London: University Press of New England.
- ドネラ・H・メドウズほか、大来佐武郎監訳  
1972 『成長の限界—ローマ・クラブ「人類の危機」レポート』東京：ダイヤモンド社。
- 前川真裕子  
2017 「オーストラリアの反捕鯨思想と人々の考える「理想的な」オーストラリア」『国立民族博物館研究報告』42 (1):71-118。
- 森田勝昭  
1994 『鯨と捕鯨の文化史』名古屋：名古屋大学出版会。
- 大隅清治  
2003 『クジラと日本人』(岩波新書) 東京：岩波書店。
- Savelle, James M.  
2005 The Development of Indigenous Whaling: Prehistoric and Historic Contexts. In N. Kishigami and J. M. Savelle (eds.) *Indigenous Use and Management of Marine Resources* (Senri Ethnological Studies 67), pp. 53-58. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Sheehan, Glenn W.  
1997 *In the Belly of the Whale: Trade and War in Eskimo Society*. Anchorage: Alaska Anthropological Association.
- Singer, Peter  
1975 *Animal Liberation: Toward an End to Man's Inhumanity to Animals*. London: Paladin

Granada Publishing.

Stoker, S. W. and I. I. Krupnik

- 1993 Subsistence Whaling. In J.J. Burns, J. J. Montague, and C. J. Cowles (eds.) *The Bowhead Whale*, pp.579-629. Lawrence, Kan. : The Society for Marine Mammalogy.

高橋美野梨

- n.d. 「EUの「クジラの生と死に対する管理」とその政治的含意」(岸上伸啓編『世界の捕鯨と捕鯨問題』(仮題)に所収予定)。

Turner, Judith

- 1990 The Whale Decides: Eskimos' and Ethnographer's Shared Consciousness on the Ice. *Études/Inuit/Studies* 14(1-2):39-52.

Victor, Anne-Marie

- 1987 Éléments Symboliques de la Chasse à la Baleine. *Études/Inuit/Studies* 11(2):139-163.

(人間文化研究機構・国立民族学博物館)